＜巻頭言＞

求めてるのはハートだけ，差し出せるのは……

池　田　暁　史

当カウンセリング研究所は本年，開設60周年を迎えた。その記念すべき年に所長という大役を拝命することになった。重責に身の引き締まる思いである。どうぞ関係各位のご支援ご協力をお願いしたい。

さて，所長の職について早々，60周年を祝うのにふさわしいおごそかな巻頭言を書くようにという厳命を受けた。しかし，これはかなりの難題である。自慢ではないが私の人間性にはおごそかさの欠片もない。文章にはおのずと書く人の人間性が反映される。おごそかでない私がどうすればおごそかな文章を書けるというのか。

それゆえ，おそらく以下の文章はまったくおごそかなものではないはずなので，それを承知でお読みいただきたい。

2023年の５月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症となったことで，インバウンドも含め，街に人の動きが戻ってきた。今年は久しぶりに旅行に出かけたという人も多いかもしれない。振り返ってみると，多くの人にとってこのコロナ禍は外出や外食もままならず，自宅で過ごす時間が増えた３年間だったであろう。その間，新たな趣味や嗜好と出会ったという人もいるかもしれない。

私個人はといえば，馴染みの鮨屋を応援するため，コロナ禍の間も定期的に何軒かの鮨屋に通い続けていたので外食の頻度はそれ以前とほとんど変わらなかった（これを不謹慎と思う人もいるかもしれないが，私にとってこれは200年続いた江戸前鮨という文化を守るために個人ができる最大限の闘いであった）。それゆえ普段の生活は他の多くの人ほど変わらなかった――もちろん大正大学への着任という仕事上の大きな変化はあった――のだが，それでも音楽を聴く時間が少し増えた。それは主にFor Tracy Hydeというバンドとの出会いが大きい。

５枚のアルバムを残し，惜しくもこの2023年３月に解散してしまった――３月に渋谷であった最終ライヴは本当に素晴らしかった――のだが，どのアルバムも私にとっては外れなしで，繰り返し聴いていたため，そうなったのだ。一アーティストにこれほど入れ込んだのは，10～20代にかけて夢中になったローリング・ストーンズとデヴィッド・ボウイ，30代からいまだに嵌まり続けている細野晴臣以来のことといってよい。

特に気に入っているのがジャケットの美しさも印象的なセカンドアルバム『he(r)art』(2017)で，いまだに飽きることなく聴いている。このアルバムはインストゥルメンタルによる導入後，

「Theme for “he(r)art”」という曲で始まるのだが，そこで次のような詞が歌われる。

求めてるのはハートだけ。
差し出せるのはアートだけ。[1)]

もちろん作者にそのような意図がないことは百も承知なのだけれど，この言葉を耳にするたび臨床の本質があまりに見事に切り取られていることにドキリとする。誤解される恐れがかなり高いので普段こういういい方はしないのだが，私が専門にする精神分析とは一言でいうなら愛の臨床である。そのことはBersani & Phillipsによる「精神分析は，セックスをしないと決めた２人が，たがいに何を話すことが可能なのかを問うものである」[2)]という真っ当だがいささか過激に聞こえる定義にも明らかだろう。

精神分析過程において患者はいろいろな形で分析家を愛する――同じくらいさまざまな形で分析家のことを憎みもするのだが――。そしてある局面で患者は分析家にも自分のことを愛して欲しいと強く望む。ときにそれは分析家からの愛の他には何もいらないというほどの水準に達する。まさに「求めてるのはハートだけ」なのである。

分析家もまたそのときどきで患者を愛し，憎む（本題から外れるので詳述しないが，分析家が患者を憎むという発想に違和感をもたれた方は，Winnicott, DW. の有名な論文「逆転移の中の憎しみ」[3)]を参照のこと）。患者が分析家からの愛を強く望んでいるまさにその瞬間に，分析家も患者のことを愛おしく思っているという事態も起こりうる。しかしそのようなときでも分析家は患者の求めている形で患者を愛したりはしない。分析家が抱く愛も憎しみもすべては分析家の中で一度処理され，「解釈」という技芸（アート）として提供される。患者に直接ハートが与えられることはない。「差し出せるのはアートだけ」なのである。

このことをことさら考えるのは，やはり大学院生のスーパーヴィジョンに携わっていることが大きい。ケースと出会い始めたばかりの彼ら／彼女らの話を聞いていると，ケースにハートを差し出そうとして上手くいかず苦労していることが多いように思う。これはわからないでもない。初学者である彼ら／彼女らには，そもそも技（スキル）が不足しているからである。「スキルがないのだから，なんとか気持ち（ハート）だけでも」と思うのは，人として素朴に理解できよう。

ところで私は精神科の専攻医（レジデント）教育にもかかわっているのだが，面白いのは彼ら／彼女らの場合，逆に技（スキル）を提供しようとして上手くいかずに苦労していることが多いという事実である。もちろん，資格を保持する前の修士課程の大学院生と医師免許を保持し２年間の初期研修を終えて精神科医を目指している専攻医とではそもそも臨床経験が異なるわけで，単純比較はできない。

ひとついえるのは，専攻医の場合，初期研修の２年間で内科や外科を回り，基本的な身体処置というスキルを既に身に着けているという点である。それゆえ，同様の感覚で精神科医としてのスキルも早く習得したいと思うことも多いのだろう。

しかし，ことはそう簡単にはいかない。前半の話と矛盾するようだが，やはりハートがなければこころの臨床はままならないのである。とはいえ，熱いハートをただたぎらせていてもアート

は生まれない。そこには専門知が必要で，スキルはそのひとつといえるのだろう。

ハート　＋　スキル　⇒　アート

つまりはこういうことなのかもしれない。

ここでまたアルバム『he(r)art』の話に戻ると，いうまでもなくこれは「heart」であり「her art」でもある。気持ち（ハート）と技芸（アート）との微妙な関係をさまざまに連想させるタイトルだなぁ，と感心する。ハートをアートに変えていく。大学院生にとってそのための大切な場所となることも本研究所の機能だと思っている。改めて関係各位のご支援をお願いしたい。

文献

1）菅梓．Theme for “he(r)art”. For Tracy Hyde. he(r)art. P-VINE, 東京，2017.

2）Bersani, L., Phillips, A. Intimacies. University of Chicago Press, Chicago, 2008.　檜垣立哉，宮澤由歌訳．親密性．洛北出版，京都．2012.

3）Winnicott, D. W. Hate in the countertransference. 1947.　Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis. Tavistock, London, 1958.　中村留貴子訳．逆転移のなかの憎しみ．北山修監訳．小児医学から精神分析へ―ウィニコット臨床論文集．岩崎学術出版社，東京，2005